

矛盾について

— 一つの序文として —

小林 幹 夫

1

始めに最も平凡なところから出発してみよう。およそ、人間の思考で、まづ避けられるべき第一のものは、矛盾である。ところが、人々は極めて安易に使われるこの「矛盾」という言葉の意味の背後にあるものに、あまり注意を向けようとしない。そこで、まず、矛盾、^{パラドックス} 逆理、^{アンティノミー} 二律背反、弁証法における矛盾の種類の違いを明確にするところから、問題提起を進めて行こう。

ギリシャに「論証術」 *Beweistheorie* が出発して以来、論理学はことばの規則の学問として成立すると同時に、その背後には、幾何学の証明の方法論が典型として置かれていた。だから、矛盾の排除が可能となるのは、まず第一に幾何学的には、公理系的前提のもとにのみ成り立っていたのである。従って矛盾とは、公理の何れかと矛盾するという形で表現されてくる。ある証明式の真か否かは、公理およびそれから発する式変形の結果又は過程の式と、矛盾するという形で顕わになってくる。元来、矛盾とは、それだけで言えるものではなく、必ず二つの意味内容の事象を比較交量するところに成立している。「……と矛盾する。」という形で、矛盾の存在が明らかになるからである。

これが、ことばの矛盾となると、更に比較交量すべきものの外延は広がってくる。日常言語では、個々の *term* (名辞) は、具体的か、抽象的にか、存在しているものを前提としているので、アリストテレスの三段論法では、命題はその推論規則に従がいがら、しかも現実にはあり得ないこととして、排棄されなければならなくなってくる。こうした矛盾を避けるために推論の基本型としての三段論法に種々の規則ができてくる。伝統的な形式論理が、現代の記号論理、集合論理の中に発展解消してしまうと、論理学は、完全に代数化を終え、例えばブール代数によって、数とことばの論理学は、合一してしまう。こうした代数化においても、公理系とそこから導かれる恒真式にはずれるか否かによって真偽値は定まってしまう。矛盾は、だから、式変形の中に証明されることになる。

逆理 (*Paradox*) は、単なる矛盾ではない。一見正しいと思われる前提から出発して、正常に推理して行っているはずなのに、どうしても矛盾に直面し、しかも、何故矛盾するようになるのかの理由が見出し得ない矛盾を言う。これには、古来幾つか有名な *Paradox* があるが、結局、クレタ島人のうそつき、ラッセルの逆理、及び *Zenon* の逆理 (これは無限分割と時間の性格の問題) の三つに帰することが出来る。つまり、自己矛盾と無限の問題と時間自身の矛盾的性格に帰せられる。(これについては、他の拙稿で触れておく) ここでは簡単にとどめておく。

二律背反 (*Antinomie*) は、お互に、相容れない矛盾対当の二つの主張があって、その何れもが肯定できる場合である。カントの二律背反はあまりにも有名であるが、これには

四つあって、次の如き主張である。

- A. 一切現象の所与全体の合成の絶対的完全性
- B. 現象における所与全体の分割の絶対的完全性
- C. 現象一般の生起の絶対的完全性
- D. 現象における変化的なものの現存在の依存性の絶対的完全性

以上四つの絶対的完全性が存在すると、存在しないと、主張できることの二律背反である。

結論から先に言うと、カントの解決方法では、夫々の両主張を共に偽りであるとするところにある。「宇宙論的理念における純粹理性の二律背反は、それが弁証的で仮象の背反であることが明らかにされることによって排除される。そして、この仮象は物自体の制約としてのみ妥当的な絶対的総体性理念を現象へ適用したことに由来する。」現象において実在するものは、表象によってのみなされる。そこに表象の有限性をとびこえて、理念として可想体からとり出された絶対的総体性が、経験と現象の有限性を離脱しているところに、両主張の肯定が成り立ってくるのである。一体、推論には、先に延長して行く型の推論と、理由づけを重ねて行く前にもどる型とがある。即ち、制約の総合を、所与現象に最も近い制約から始めて、より遠い制約へ進み行く背進的 (regressiv) 総合と、最も近い結果から遠い制約へ進み行く前進的 (progressiv) 総合とがある。今、推論の両端を前提と結論とすると、宇宙論的理念は、背進的総合の総体性に関与し、前提を反省し返し、理由を尋ねかえすところに成立する。しかも、数学では無限的前進 (progressus in infinitum) が許されるのに、概念の研究者には、不定的前進 (progressus in indifinitum) しか許されないとされている。換言すると、現象はつねに表象であって、これは必ず感性的に制約された有限性をもっているのに、理性推理は思弁によってえられた無限と総体性をとりあつかうところに、二律背反の矛盾が結果として生じてくるのである。

20世紀の K. Gödel の発見した矛盾は、これとは大分趣きを異にする。ある公理系があって、その公理系内の無矛盾性は、その公理内の論理式では証明不可能であって、必ずその公理系以外の他の要素を導入する必要があると言う矛盾である。

以上あげたように、矛盾は時に一つの公理系設定か、二つの類比対応づけかがあって、始めて矛盾として我々の理性の目の前に現われる。

しかし、論理的思考にとって、無矛盾性は、第一にとりあげられるべき必要不可欠の要請である。無矛盾性、整合性、形式性は、論理的思考の最大の前提となっているからである。しかも整合性、論理形式の一貫性は、これも巨視的に見て、一つの無矛盾性のための構成的要素とも言える。これに反して人間の思惟と推論からくる抽象性、普遍性と裏腹の形式性は、元来、思考そのものの性格とも言えるので、無矛盾性は、我々の推論の唯一絶対の命令とも言えることができるのかもしれない。

2

弁証法については、形式論理とは、事情がかなり違っている。形式論理では矛盾律は最も重大な法則の一つであるが、弁証法は対立矛盾するものがあるから始めて弁証法たりうるのであるから、矛盾律は大分様相が変わってくる。Hegel では悟性は区別する能力、理性は思弁の能力だから、悟性の段階で見出された矛盾は、理性の段階では否定の否定を通して、総合され、解消してしまう。惟うに、Hegel の時代には、まだ心理学は実験心理とし

て哲学から独立しきったとは言えず、ヘーゲルの精神現象学は内省の心理学、つまり意識現象を前提せずには成立しえない。同じく矛盾と言っても、形式論理では矛盾は排棄さるべきものであるのに反し、弁証法では、反省的思惟の必要不可欠の一要素とも言える。

例えばヘーゲルはその小論理学のうちで、成 (**Werden**) について、「無と同一のもとしての有、および有と同一のもとしての無は、消滅するものにしかすぎない。成は自己内の矛盾によってくずれ、有と無が揚棄されて統一となる。かくしてその成果は定有 (**Dasein**) である。」と言っているが、この言葉の示すように、弁証法は揚棄があって始めて統一に至り、その統一に至るために、否定の否定を押し進める踏み石として、矛盾は通るべき絶対必要な一つの過程である。有限なものは、あるものであるとともに、またその他者でもあるという矛盾を含み、その矛盾が、有 (**Sein**)、定有 (**Dasein**)、現存在 (**Existenz**) から絶対的理念 (**Absolute Idee**) へと発展する過程にも生じてくる。ヘーゲルにとって、矛盾とは彼の **Reflexion**、即ち相関的思惟のための、一つの役割を与えられた機能ともいえる。揚棄も移行も発展も、矛盾があって始めて成立しうるのである。

しかし、同じく弁証法と言っても、ヘーゲルとエンゲルスと毛沢東では違う。又、キェルケゴールでは更に特異な局面が露呈してくる。

ヘーゲルでは弁証法は、認識論そのものであり現実の存在から形而上学への架け橋でもある。

更に、**Hegel** の小論理学の中から引用してみよう。「一般に世界を動かすものは矛盾である。矛盾というものは考えられないというのは笑うべきことである。このような主張において正しい点は、ただ、矛盾は最後のものではなく、自分自身によって自己を揚棄するという点である。」

普通に概念を普遍、特殊、個と分けているが、それを有 (**Sein**) の本質に即して言うと同じ、区別、根拠に対応する。個が個でありうるのは、物の存在、つまり、**Sein** が、本質的にその性質 (**Eigenschaft**) として個有の根拠をもっているからであり、その個が集って種をなすのは、その性質の特殊性がある故であり、その特殊性は区別することによって始めて認識されうる。類は、種の特殊性を更に揚棄して同一性を反省した時、普遍的な概念として明らかになってくる。

このように存在が反省的思惟によって次々と揚棄され、**Sein**, **Dasein**, **Qualität**, **Quantität**, **Vernunft** に高められ、又、即自、対自、総合と進みうるのは、すべて矛盾が移行と反照の契機となって弁証法的過程を推進させる機能と役割をもっている故である。この発展を促がすものが、即ち矛盾を契機とする媒介である。その媒介とは、ヘーゲルによると自分を運動させながら自分自身としての同一性を得ていること、言い換えれば、自分自身のうちに帰ってくる反省、対自的にある自我という契機、純粹の否定性である。

ここで、我々は、ヘーゲルのあの有名な言葉「すべて理性的なものは現実的であり、すべて現実的なのは理性的である。」ということばを解釈してみる。

Hegel はその小論理の中で、「あらゆる現実的なのは、それが真実である限り、理念であり、理念を通じてのみ、また理念によってのみ、その真理を持っている。」と言っている。

ヘーゲルにとっては、理念こそ真理である。だから、認識する人間にとっては、彼の理念 (**Idee**) に合致することこそ、真理へ至る道である。理念は最初の一つの普遍的な実体

(Substanz)として存在し、その意味で単なる Sein (有)であり、また、直接的な自然である。それが、弁証法的発展を通じて、最後の到達点では、アリストテレスの思惟の思惟 (νόσις νοήσεως)として絶対的理念となる。そこでは意志の世界と知識の世界とは一致し、この意味で絶対的理念は、無限の自己復帰と自己同一の過程である。そうすると、例えば悪い人間とか、真実でない人間、つまり人間の概念やその使命に合わないような行為をする人間でも、その人間らしからぬ人間が、なんらかの点で人間の普遍的概念を残している限り、人間として存在する。それ以上になった時、その人間は鬼畜といわれたり、悪魔といわれるようになり、もう人間の皮をかぶった人間以外のものとしてしか遇されなくなる。だから人間は、人間という概念に外れぬ限り、現実的に人間でありうる。そしてまた、現実的な人間は、単なる生命としてだけの幼児としての人間から一人前の人間として概念的に区別されるのは、それ自身が、即自的存在から他人の存在を自覚して対自的存在としての客観性をもつに至ってからである。だから現実的な人間となるためには、理性的に主観的だけの存在から客観的存在に移行せねばならぬ。こういう点から、理性的なものは現実的、現実的なものは理性的なものである。

ここで彼の神観を簡単にふり返って見ると、言うまでもなく彼のいう絶対者は、絶対的理念であり、近づけば、次から次へと遠のいて行く悪無限ではなくて、総てを包擁する真の無限であり、個別や種に対する類であり、一つの全体であり、それがそのまま、真理でもあり、また、意志と認識、倫理と宗教の合一したアリストテレス的な又スピノザ的でもある絶対者である。しかし、その絶対者を絶対者として人間が認識できるのは、単に区別するだけの悟性の段階から始まって思弁の段階、理性の段階に至って始って可能なのである。

ともあれ、ヘーゲルの矛盾は、単なる自己の反省から、無限者、絶対者自身の自己同一性を保っているものへの反省に至るための契機としての役割をもった特殊の矛盾と言わねばならない。この意味で、形式論理で言う矛盾と、弁証法での矛盾は、全然、違った性格をもっていると言えよう。

3

さて、ここで、私達は、もう一度矛盾律を思い出してみよう。「Aは非Aではない。」または、「Aと非Aが同時に成り立つことはあり得ない。」と言う矛盾律も、Hegelの区別する能力、悟性の段階では成り立っても、視点を変えて、理性の段階に至ると、an sichからみた矛盾も、für sichの客観性、つまりIdeeに近づくにつれて、解消されてしまう。ヘーゲルの論理では、このように視点転換、又は、一つの次元から他の次元への反省があって、始めて成立してくるのである。

しかし、弁証法と言っても、Hegelの弁証法とKierkegaardの弁証法にはあまりにも大きな開きがある。弁証法は、Hegel, Marx, Engels, Kierkegaard, 毛沢東などの夫々の弁証法においては、単に思考方法、又は、それぞれの哲学や宗教目標のための手段に転じてしまっている。そこで、こうした弁証法間の差異をどこに視座を据えて見るかが、また問題となってくる。我々の出発点の問題は個々の矛盾の性格把握とその弁別であったが、弁証法における矛盾は、こうした幾つかの弁証法の差異点をもふりかえらないと、認識方法としての弁証法としての矛盾の性格をも解明しえない怨みが残ってくる。

夫々の正しい認識に至るための手段または方法としての弁証法は、その正しい認識が何

を認識対象としているのかによって異ってくる。ヘーゲルでは、存在論から形而上学へ、そして、学問の種類から言うと、反省的内観法による論理学、法律、歴史、神学、哲学と言えるし、マルクスでは、存在は商品として労働価値の形而上学的性格を帯びてくる一方、資本主義の諸悪の解明に向かって、労働者の政治的団結の **International** の政治運動を呼び出して来る。学問対象から言うと、マルクスの場合は、経済学、歴史、政治、文化論と言えよう。エンゲルスの自然弁証法は、もっぱら自然史および自然認識つまり科学の弁証法的性格に限られている。キエルケゴールの質的弁証法では、彼独自の人間観から神学への発展と見ることができ、学問対象から言うと、人生論、神学、人間学と言えよう。

こうした弁証法における差異をどこから再び統一的に見ることが出来るかが問題となる。彼等の弁証法は、夫々、その出発点において、違った学問対象を頭において、始められていると言える。我々はここで、これをカテゴリーの選択の仕方の差異からくるのではないかとも見ることができる。ここで云うカテゴリーとは、カントの意味でもなく、またギリシャ的な最も広い外延を有する普遍概念としてでもなく、むしろ、学問対象が違い、思考対象も違い、認識しようとする意図と方向の違いからくる基礎概念の選択の意味に考える。

例えば、Hegel の精神現象学と小論理学においてとられた基礎概念を比較してみると、精神現象学では自己意識と精神を二分し、自己意識は意識、自己意識、理性に分けられ、夫々意識は自己疎外され、対自的、客観的に止揚されて、意識から自己意識へ、自己意識から理性へと発展外化する。そして理性が外化されたものが外ならぬ精神であり、それは人倫や道徳性として、人間個人の意識を離れて社会に実在する。その極限に絶対知としての人間の側からの形而上的認識、神の側からの自己同一性とその直感が置かれている。エンチクロペディの中の所謂小論理学では、まず有 (Sein) から始まって、それは、質、量、限度に分れ、次に本質 (Wesen) は現存在 (Existenz) の根拠 (Grund) としての本質、現象、現実性に分れ、更に概念 (Begriff) は主観的概念、客観、理念の三者に分かれている。そしてその到達点は理念の最後に位する絶対的理念である。

こう見てくると、ヘーゲルでは、現象学でも論理学でも、認識の究極目標には始めにもう神が置かれてあって、ただ現象学では自己意識から始まるのに対して、論理学では Sein から始まっているにしか過ぎない。方法は実に認識の目標と対象と方向によって定まっていたのである。

そして、しかも、Hegel の所謂絶対理念は、彼の言う通り悪無限ではなく、全体として部分を包みこむ無限であり、その外在体が外ならぬ自然である限り、その神の姿はアリストテレス的不動の動者であり、スピノザ的汎神論の傾向をも帯び、彼の敵対者でもあった Schelling の同質の一者にさえ、そう遠くはないとさえ言えることになってくる。

ここに、マルクスの攻撃する点が介在してくる。マルクスはそのヘーゲルの弁証法と哲学一般の批判の中で、ヘーゲルの観念論を攻撃すると共に、フオイエルバッハの名をあげて、あまりにも神学的な彼の方法を批判する。

言ってみれば、「彼の思想は、自然と人間との外部に住んでいる固定した精神」の自己運動とすることが出来る。この精神が、人間的思惟の外在化に始まって、外在態を止揚して法ともなり、歴史を動かす理性にさえ変ってくる。人格神と言う神が死んだ代わりに、理性と言う別の神が、息を吹きかえして、社会と歴史と人間精神を支配することになる。矛盾はその、各々の段階を外在態へもたらす契機にしかすぎなくなっている。

毛沢東の弁証法には、認識の方向と共に、実践の色彩が非常に濃くなっている。彼の方法が実践のさ中に生まれ、観念的状况認識から戦略のために必要な客観的認識に至る道を説いたからであろう。ここで、矛盾とは冒険的戦略と日和見主義的傍観主義の何れをも捨てて、客観的情况認識に至る手段と解せられる。ヘーゲルの弁証法の後に神が置かれてあったとして、毛沢東の後には、日本軍又は蒋介石軍への勝利を置かざるをえなかった歴史的運命が、定まっていた。そして、そうした戦争の目的は、資本主義の発展的段階としての植民地帝国主義から中国を護らねばならぬ民族の使命があった。

Kierkegaardの弁証法は、質的弁証法と言われるように、矛盾対立のギャップは、Hegelの弁証法よりも、更に深く矛盾の絶対的な分裂はHegelよりも、対立激化していると見られる。HegelもKierkegaardも、一つの神学に到達する点では同じであるが、その過程の方法には非常に距離があると言わねばならない。

レヴィットは言う、現実に関心において基礎づけることはケルケゴール、フォイエルバッハ、ルーゲ及びマルクスにおいて共通である。もちろん関心の種類はフォイエルバッハでは感性的に、……マルクスでは実践的社会的に規定されている。ケルケゴールは「関心」は「情熱」即ち「パトス」と称して、それを、瞑想的理性的に対処する。情熱の本質は、それがヘーゲルの体系の閉鎖的「終結」と違って「二者選一的」に決定する決断に駆りたてるということである。この跳躍、即ち弁証法的反省という「方法の逆の進行に対する決然たる反抗」は、すぐれた意味における一つの決定である。跳躍の用意ができてその決定の断乎たる情熱は直接的な始まりを措定する。これに反してヘーゲル論理学の始まりは実際には「直接的なもの」をもって始まらず、極端なる反省の産物、即ち現実に存在する実在の抽象の下に純粹なる有一般をもって始まるとレヴィットは言う。

1848年、マルクスは「共産党宣言」(1847)において、ケルケゴールは「文学的告知」(1846年)をもって、一方は労働者の団結を呼びかけ、一方は「神の前の個々人の内面的存在」の自覚を問いかける。こうして、マルクスが見出した最大の矛盾は、資本主義の呼び出す社会矛盾であり、ケルケゴールが強く指摘する矛盾は二者選一を知らないヘーゲル流の統一を予定された認識論的な矛盾ではなく、神と人間との間の埋めようがない質的なギャップであった。

このように等しく弁証法でありながら、照らし出された「矛盾」の種類によって、マルクスでは政治運動と革命によってこそ、終結的には矛盾は解決されねばならず、ケルケゴールでは、罪におちこむ人間が神の前の孤独存在を知って、罪と宥しを通じて再び神と人間との1対1対応への架け橋となるのが、矛盾であり、更に20世紀の毛沢東においては戦争遂行の前に横たわる矛盾を、冒険主義と日和見主義のもつ危険を回避して、正しい認識と反省と実践によって勝利に至るための認識の方法が、矛盾の解決策となっている。ヘーゲルを含めて、マルクス、ケルケゴール、毛沢東それぞれの照らし出す矛盾は、各々役割と方法を異にしてはいるが、とも角、終局的に否定の否定を通じて総合されるべき運命にあることは同然である。

4

さて、我々は現代の視座に立って、もう一度矛盾と矛盾を発展の契機として必要とする弁証法をふり返ることは出来ないであろうか。哲学は、今、もう一度大きな曲り角に立っ

ているとすると、一体その曲り角を導いて行く光は、どこから照らし出されるのであろうか。

その前に、我々はもう一度西欧哲学の伝統をふりかえってみよう。プラトンも 'αεὶ ὁ ἄνθρωπος ἀριθμητίζει (いつでも人間は数学をする) と言っているように、そしてアリストテレスの形而上学からも窺知することが出来るように、ギリシャでは、万物の根元を求めて、普遍、^{ウーシア}実体、存在を主にことばと論理から究明しようとしていた。イデア数論もこうした普遍を求める一つの試みと言えよう。この存在とプラトンのイデア論が、アリストテレスを通して、ヘーゲルにまで連なって行ったことは、我々の既に論じたところからも明らかであろう。

更に、キリスト教の中世時代に入ると、回心と啓示による自己反省又は悔い改めが、自己の転回を契機とする存在の意義の転回を教える。それがヘーゲルにおいて、即自、対自、総合の論理に生かされてくる。そして単に三位一体や人格的神の姿は、ヘーゲルでは理性と歴史が結びついて、理性と絶対的精神という非人間的なものが世界と歴史を支配するに至る。レヴィトも指適するように、ヘーゲルでは国家と理性が絶対者となって終末論が完成されてしまうのである。

こうした観点から見ると、ヘーゲルも亦、ヨーロッパの古代からの精神史を受けついで哲学者であり、そして、そこから一步も出ていなかったと言えよう。

現代の視座から矛盾を見るときは、一体どういうことであろうか。我々は幾つもの事実について西欧19世紀にはなかった現代の特質を論ずることが出来るが、ここでは、そのうちの二三の点を指摘するだけで結論にかえておく。

第一にヘーゲルの弁証法が今迄の論理的矛盾と違う点は自己反省からくる。そこでは仮に対立があったとしても、それは自己の思考と意識は、移行しても否定転向しても止揚しても、自己自身も存在も何等変容を受けるわけではない。その点にマルクスの叫ぶ、哲学が神学的世界解釈に終わってしまう無力性がある。

ところが、現代では、世界的にも国内的にも、断絶と対立が、そのまま、対立し激化して、たやすく止揚されようとしなない。断絶が断絶のまま持続して、そこにはげしいにくしみと斗争が生れて、和解や結合には、到りそうもない。一見、歴史的に見て定立、反定立、総合のように見えても、それは表面的であって、内部対立は総合において、益々そのはげしさを増して行く。絶対精神を仮に一つの過程と見たとしても、我々は Hegel のように楽観的に、又は予定調和的に現実と歴史を見ることは許されないのである。

次に、矛盾と言うことばが、いろんな意味で、概念内容を広め、又、一方で、全然違った形で現われてくる。つまり、矛盾はギリシャ的な形式論法のことばの矛盾だけでは終らず、機械と人間の意志と人間集団の組織の意志と云うように、多様化して来ている。その点で、矛盾が古代や中世そして或る場合には19世紀の意義とも使われる矛盾と言うことばは同じであっても、内包する性格をことにし、社会性を強く帯びて来たり、逆にある場合には、機械と結びついて単純化されたり、複雑にシステム化したりしてくる。その意味で、我々は現代の矛盾をもう一度分析する必要に迫られている。例えば、機械文明と個人の自己疎外などに見られる矛盾は、普通、人は何の奇異感も感ぜずに使っているが、厳密には、ギリシャ的な演繹論理だけの矛盾概念とは、全然その意義内容を変容してしまっているし、矛盾のもつ効果も性格を異にしてしまっている。

第三に論理学はことばの法則であり、人間がことばで思惟すると言う必然的宿命を担っている限り、それは又正しい思惟の原理と原則でもあったはずであるが、現代では思惟の前に予測と選択と決断が強調され、論理学自身も人間の個人の思考だけから離れて、社会の組織の面から考え直される必要に迫られている。

そして又、現代の論理の特色の一つに、確率論理、様相論理、多値論理をもつけ加えねばならぬ。ギリシャ以来の伝統的な論理学では主に真偽2値だけが問題であったが、現代人の思考方法では、例えば **Simulation** に見られるように、偶然的要素を加味した不確定の見通しのもとに決断を下すことが要求される。17世紀頃には単に遊戯の偶然性から人の興味をさそった確率的思考方法が、現代では最も日常的な必要性をもった思考方法となってきた。勿論、確率論理にも統計的思考方法にも多値論理にも、それが論理である限り、矛盾は厳然と存在するし、やはりこれを排除することは理の当然ではあるが、少くとも真の論理値が幾つも置かれている点に、在来の論理学とは違っている。従って論理学を離れた思考方法の基礎としても応用面は非常に広がってきている。

実はこうした確率統計的思考方法は、空間、場、状況の性格が19世紀以来複雑多様な様相を帯びて我々の前に現われ、今までのニュートン、カント的な空間とは違った性質で考えられるに至ったためであって、量子力学の光の波動と直進の矛盾も、その理論的解決に確率論が大いに役に立っている。しかもそれだけではなく、幾つかの **Axiomatic System** によって決まる空間を想定しうる現代人は、空間の公理系を選択することによって、操作的に空間の性格を変えて考えることができるようになった。そんな点で、一つの公理系が決定した後は無矛盾の論理式変形だけが作業目的であった時代とは、我々現代人は全然別の時点に立っていることになる。

更に我々は驚異の眼をもって情報処理と **Computer** の時代を迎えたのであるが、ここに注目すべきことは、ベトナム戦争において、アメリカはその戦略決定に極度に **Computer** を駆使して合理的に計画を実施したはずなのに、中国的な戦略に破れたことであろう。これは近代的統一的な戦略指令は、全体的な戦場を統一的に認識し、全軍を組織的に動かすのには有利ではあっても、局地的な些細な状況変化に即座に適応した多方面多方向からの兵士各個人の上体的判断の方が、より有勢を保ちえた代表的な実例と言えよう。この点では機械力を使った西歐的 **Cogito** が、毛沢東に端を発する弁証法的認識方法に破れたと見ることもできようし、又、時々刻々に変化して行く状況と情報の流れに適応しうるのには、むしろゲリラ戦による個人的な判断の方が、いくら早く処理計算できても固定した情報しかもちえない一方向的な判断に優勢を保ち続けた実例とも云いえよう。これも一つの弁証法的思考方法と合理的認識的思考方法との斗いとも見ることもできよう。宇宙征服には非常な成功をおさめたアメリカの思考方法が、必ずしも万事に有利とは断定できないのである。ここに、論理と思考方法、認識と決断、矛盾排除の方法論の差違が戦争と勝敗と云う形で浮彫にされていると見られるのではなからうか。

こんな観点からしても、もし我々が哲学と歴史と論理の方向転回の曲り角に立っているとしたら、我々はどんな意義で、自然、社会、人間にまっわる矛盾を見出し、そして又どんな方向から、どんな方法でその矛盾を解決しようとするのか、問題は更に困難の度を加えて、我々の前途に待っているのである。

主なる参考文献

1. Hegel G. W. F. ; Wissenschaft der Logik, Hegel, Sämtliche Werke 4. 5. (武市健人訳, 大論理学)
2. Hegel G. W. F. ; Phänomenologie des Geistes, Hegel, Sämtliche Werke 2. (世界の名著, ヘーゲル, 精神現象学序論のみ)
3. Hegel G. W. F. ; Enzyklopädie der Philosophischen Wissenschaften im Grundrisse, Hegel, Sämtliche Werke 6. (松村一人訳, (小論理学・岩波) 及び船山信一訳・精神哲学, 岩波文庫)
4. Kant, I. ; Kritik der reinen Vernunft (天野貞裕訳, 純粹理性批判・岩波文庫)
5. Dunayevskaya R. ; Marxism and Freedom from 1776 until today (三浦正夫・対馬忠行訳 疏外と革命, マルクス主義の再建)
6. Löwith, K. ; Von Hegel zu Nietzsche (柴田治三郎訳・ヘーゲルからニイチエへ)
7. 毛沢東, 矛盾論・実践論 (毛沢東選集第2巻)
8. 三木清全集・第4巻・知識哲学・弁証法・現代思潮他
9. マルクス・エンゲルス選集第1巻 (そのうちのヘーゲル批判) (城塚登等訳)
10. エンゲルス (菅原・寺沢訳) 自然弁証法
11. Kutschera, von, F. ; Die Antinomie der Logik.